

日本語訓点表記としての白点・朱点の始原

小林 芳 規

一、日本語訓点表記の起源についての再考

日本語の訓点表記の起源を考えるには、訓点研究の歴史を顧みると、二つの段階に分けてみる必要がある。第一段階は、八世紀（奈良時代）の角筆訓点表記の起源であり、第二段階は九世紀初（平安時代初頭）に始まる白点・朱点の訓点表記の始原である。

第一段階の八世紀における角筆訓点を対象としない立場からは、日本語訓点表記の起源は第二段階から説くことになる。従来、日本ではこの第二段階から説かれて来た。しかし、八世紀に角筆による凹みで訓点表記が施された奈良写経が近時発見され、次々と見出されている上に、その訓点表記が第二段階の白点・朱点による訓点表記に影響していることを考慮すると、起源を第一段階の八世紀に遡って先ず考察しなければならない。

起源を八世紀に遡って考察することは、日本語訓点表記を、狭く日本国内の問題としてだけで把えるのではなく、広く東アジアにおける古代学問の方法とその交流という視点で把えることになる。

毛筆で墨書したり木版で印刷したりした紙本墨書の經典を読解するために、注解の漢字や釈読に必要な諸符号を、その經典に直

接に書き入れることが、東アジアにおける古代学問の共通の方法として、曾て中国大陸をはじめ朝鮮半島と日本とで行われていた。このことは、近時の角筆文献の発見によって一層はつきりして来た。

中国大陸では、五世紀～十世紀の敦煌文献・九世紀の唐写本・

十二世紀の宋版一切経

朝鮮半島では、八世紀の新羅經典・十一世紀刊の初雕高麗版等日本においては、八世紀の一切経等

これらの經典に角筆加点を基本とする書き入れが確認されたことによる。

その多くが角筆の凹みだけの加点だったために見逃されていたのが発見された結果、東アジアの漢字文化圏において、読解した言語はそれぞれの国で異なるが、經典に直接に加点するという共通の方法が存し、交流による影響関係も考えられるようになって来た。

それまで、日本では毛筆による白書・朱書の訓点を書き入れた文献（「訓点資料」と称し、「白点」「朱点」と呼ぶ）が専ら研究対象とされた。白点・朱点の現存する最古の訓点資料が九世紀初であるから、日本語訓点表記は九世紀初に起ったと説かれ、その白点・朱点の使用者が東大寺など奈良（南都）古宗の僧であった

ので、日本語訓点は南都僧が創案したと説かれた¹。訓点表記の重要な要素は、片仮名とヲコト点である。従って片仮名もヲコト点も南都僧が創案したと説かれて来た。

しかし、角筆加點の発見によって、次の三点が修正されることになった。

1、日本の訓点は、九世紀を遡って、八世紀(奈良時代)に角筆で施されていた²。

2、八世紀の新羅經典の一つ「判比量論」に真仮名とともに省画仮名が角筆で加點されてあり、日本の八世紀の角筆加點にも同じ省画仮名(片仮名の源)が用いられていて、節博士や合符等まで一致することにより、その影響が考えられる³。

3、ヲコト点(点吐)は八世紀の新羅で既に使われていて(「華嚴文義要決」、初雕高麗版の華嚴經の点吐は、その原型が日本の華嚴經のヲコト点に影響したと考えられる⁴)。これらのことは、日本語訓点表記の起源の一つが、角筆加點による新羅の影響にあることを語っている。

これが第一段階の起源であり、既に発表して来たところである。この小考では、第二段階の白点・朱点が何故に九世紀初に始まったのか、それはどのような状況で起ったのかを、最近の奈良仏教の研究を踏まえて説くことにする。

白点・朱点を經典の全卷に漢字・仮名などで加點して訓読することは、中国大陆や朝鮮半島の十二世紀以前の文献には管見に入らない。これに対して、日本の訓点は白点・朱点を使うことによって独自の発達を遂げた。

二、勘經の白書

經典に白書を使うことは、本文の字句の誤りを正すなどの校正に見られる。敦煌文献や日本の奈良(八世紀)写經で行われている。

この字句の校正に使っていた白書の使用を拡げて經典を読解する時の訓点に流用したのが白点の始まりと考えられる。その具体的な状況が「勘經」という行為で知られるようになった。

校正が本文書写後に底本との比較によって文字の誤脱を補訂する作業であるのに対して、勘經は底本とは別のテキスト(證本)によって対校すると共に、本經の内容まで研究し理解し教学するという深化した校訂作業である⁵。

(1) 勘經の作業内容

光明皇后の発願によって書写された一切經(天平十二年(七四〇)五月一日經)の願文のあとに付された追跋によると、勘經には「正」「読」「證」の三種の作業が知られる⁶。

(a) 天平勝寶七歳(七五五) 正月十日從八位上丹波員外目日置造 菟麻呂正

正八位上行大學少屬内藏伊美吉全成正

大徳興福寺沙門慈訓證

(正倉院聖語藏「過去莊嚴劫千仏名經」)

(b) 天平勝寶七歳十月十七日正八位下守少内記林連廣野正

大安寺沙門琳琳證

沙門敬明 沙門玄藏 沙門環忍 沙門行脩證

(正倉院聖語藏「大集經月藏分卷第一」)

(c) 天平勝寶七歳九月三日從七位上守大學直講上毛野君立麻呂正

大徳元興寺沙門勝寂 大徳沙門了行 大徳沙門尊應 業了

沙門法隆

(正倉院聖語藏「深密解脫經卷第二」)

勘經は、大学直講や少内記等の官人と複数の僧とで行われ、

「誦」は僧が読みそれを聞きながら官人がチエツクし、作業が確實に済まされたことを「證」するとされる。

(2) 「勘経」という用語の初見

天平勝宝年間(七四九—五七)に所見し始め、「勘経所」も現れる。

(3) 勘経の始まり

勘経は、興福寺僧の慈訓を指導者とし、良弁を推進者として、光明皇后の一切経具備の必要性に俟つて、天平勝宝年間に始まった事業とされる。

慈訓は、華嚴経講説を東大寺前身の金鍾寺において審詳がわが国で初めて行つた時の複師を務めた僧で、審詳に次いで講師を務めた。

(4) 五月一日経の勘経以外の勘経

① 新旧華嚴経と大般若経の勘経

聖武天皇の勅により、華嚴経を根本とする一切経の転読講説の意図に基づき東大寺写経所で実施された。

② 景雲一切経の勘経

孝謙天皇の発願により、宝字二年(七五八)頃から神護景雲二年(七六八)頃まで景雲一切経の写経が実施され、その勘経が宝字六年(七六二)から神護景雲三年七月頃まで行われ、證本として五月一日経が用いられ、章疏の勘経にも及んだ。

(5) 勘経に用いた白書・朱書

① 天平十二年願経「四分律」(正倉院聖語藏)の例(杉本一樹氏による)

〔墨書〕題と本文書写(天平九—十年)、願文(天平十三年)

〔朱書〕題の訂正(天平十八—十九年又は天平勝宝年間)、誤

記訂正

〔白書〕他本(鑑真将来の唐経)との比較(鑑真来朝の天平

勝宝五年(七五二)十二月以降、宝字(七五七—

の交)を勘経所で行い、誤記訂正

白点(平安極初期)

② 勘経を行つた僧・官人名の白書

〔讀勝光師〕(白書) (正倉院聖語藏)「仏説入如来德智不思議経卷下」五月一日経

〔勝光カ〕「行」(白書) (正倉院聖語藏)「過去現在因果経卷二・四・五」五月一日経

〔勝光行〕(白書) (正倉院聖語藏)「仏説濡首菩薩无上清浄分衛経卷上・下」五月一日経

〔勝光讀〕(白書) (正倉院聖語藏)「宝積三昧文殊師利問法身経」五月一日経

〔廣野〕(白書) (正倉院聖語藏)「仏説入如来德智不思議経卷下」五月一日経

〔廣野〕「讀」(白書) (正倉院聖語藏)「漸備一切智徳経卷三、五」五月一日経

これらの僧や官人の名がそれぞれの経巻の巻末に白書されているという。この同じ白書で本文中に書き入れが存すると推定されるが、未調査である。そこで他の経巻を用いて勘経の内容を見ることにする。

三、勘経としての華嚴刊定記

唐の惠苑が撰述した華嚴刊定記が、奈良時代(八世紀)に勘経として用いられたことは次の四点から知られる。

1、審詳の蔵書の華嚴刊定記が勘経の證本として借用されている。
○正倉院文書的神護景雲二年（七六八）四月二十九日付「奉寫一切經司移」
奉寫一切經司移東大寺司
請花嚴經惠園師疏一部審詳師所著

右、為須勘經所證本、所請如件、以移

神護景雲二年四月廿九日別當圖書少屬從七位上大隅
忌寸公足

次官從五位下 王

「司判許」

花嚴經疏十二卷第一三四五六八十二三三十四五十六等卷々
大判官美努連邊芳呂
主典寫井連荒海
審詳師經之内

右件疏、附返使鳥取古万呂、令請如件

案主上馬養」

審詳は新羅學生と称され、新羅から帰朝に際して多くの新羅經典を將來した。新羅で華嚴刊定記が用いられたことは、皇龍寺僧の表員の「華嚴文義要決」の中に引用されていること¹⁵で知られる。

2、大東急記念文庫蔵「華嚴刊定記卷第五」の卷末識語に東大寺において新羅正本と「校勘」したと記している。

○大東急記念文庫蔵「華嚴刊定記卷第五」卷末識語

（本文と同筆）無上菩提因／近事智鏡

（別筆）「延曆二年（七八三）十一月廿三日於東大寺與新／羅

正本自校勘畢以此善根生々之中／殖金剛種斷一切障
共諸含識入無尋門」

（又別筆）「以延曆七年八月十二日與唐正本相對校勘取捨／得

失措定此本後學存意可幸察耳自後諸／卷亦同此矣
更不録年日等也」

奈良時代（八世紀）の華嚴刊定記には白書・朱書で本文字句の校正と共に本文を「読」解した加点を書き入れている。

3、大東急記念文庫蔵「華嚴刊定記卷第五」の白書・朱書

この「華嚴刊定記卷第五」の白書・朱書については月本雅幸氏の調査¹⁶と呉美寧・金星周氏の精査¹⁷とがある。その書き入れの内容は、字句の校合と科段符・句切点・語順符である。朱二種と白書との書き入れ時期については尚検討の余地があると思われるが、語順符の、例えば、

中有三句・今此答中品有兩句・由東問中初二句為一句故也・
（加点は朱）

等が、日本の訓点では使われず新羅を始め韓国の加點資料に用いられるところから、語順符・句切点等が、延曆二年に新羅正本と校勘した時に施されたと見るのが自然であろう。さすれば「校勘」とは本文の字句を校合すると共に内容まで読解したことを意味することが判る。

4、東大寺図書館蔵「華嚴刊定記卷第九」（奈良時代書写）の朱書白書を用いず、朱書だけで、字句の訂正・補入と句切点、返読符、語順符が施されている。

(1) 字句の訂正・補入

四根（訂正）欲者（訂正）

雖有（補入）說後說為勝（補入）

菩薩（補入）衆生故求不辭倦（補入）「為」を書き

その上から朱書で「為」を書く

(2) 句切点

常渴聞無足故「・」二如所等是思惠「・」
「・」或「・」從未以尋本「・」

(3) 返読符

今在世^二出方為起勝^一「・」
何故不^三得有^二脩友^一「・」
脩友^三／趣^二「・」見是解^一心^一「・」

(4) 語順符

名同一趣入利^三來往路之名^二尔^一「・」
「・」欲起報惡業^三故名熾然^二「・」

右の(1)(2)(3)(4)の朱書が同筆で施されているので、字句の訂正・補入だけでなく、同時に句切点と共に返読符・語順符を施して訓読をも行ったことが知られ、勘経として用いられたことが分る。しかも返読符と語順符は日本の訓点としては用いない符号であるから、證本として新羅の華嚴刊定記(恐らく審詳將來)が用いられ、それに加添されていた符号を書き入れたものと考えられる。

四、神護景雲經の勘経

孝謙天皇の発願により神護景雲二年(七六八)頃までに書写された景雲一切経は、勘経が行われた後に東大寺に施入されて、その原本が聖語藏と東大寺に現藏されている。ここではその中から調査し得た二経巻を先ず取上げて、その白書が勘経として用いられたことを説いてみる。

5、東大寺藏「根本説一切有部毗奈耶卷第二」二卷(前半と後半に分巻)

白書による字句の訂正と句切点、語順符、「乙」による返読、

稀に訓読を表す漢字・仮名が施されている。白書より前に角筆の漢字、梵唄譜、合符等がある。

(1) 字句の訂正

即便欲出偈^角 女思念^角 (下欄)「偈」^角 (第一卷) (角筆の上に白書)
不與取覺^角 處第二 (下欄)「字」^角 (第一卷)

(2) 句切点(点というより短横線)

謂大^角小便逼^角風勢所持^角嗚指微伽蟲所醫^角欲染現前^角 (第一卷)
稻不種^角自生^角無糠穢長四指日暮收穫^角 (第一卷)

(3) 語順符

寂初營立家宅便有^角家室名生時有^角有情不行惡法^角 (第一卷)
王曰我不曾憶^角仁若憶者為我憶之^角 (第二卷)

(4) 「乙」による返読

欲娶為妻彼便告曰我不惜命^乙 入汝舍乎時彼長者求妻不得^乙
自知家事^角 (第一卷)

(5) 訓読を表す漢字

謂女^角男黃門不與者謂無人授與外謂金等以盜^角心取者^角「盜」の下欄「有」^角 (第二卷)
自取^角不與取^角盜心他掌物及作他物想有三五^角 不同^角 (第二卷)

(6) 訓読を表す省画仮名

此世界將壞之時多^角 諸有情生光音天妙色意樂^角 (第一卷)
右の(1)(2)(3)(4)(5)(6)の白書が同筆で施されているので、字句の訂正と同時に訓読も行われたことが知られ、勘経として用いられたことが分る。しかも語順符を用いていることは、この勘経の證本として新羅經の用いられたことが推測される。(4)の「乙」は一字の返読に用いている。日本の訓点には使用例を見ない。唐の韓愈「讀鶉冠子」の會國藩の注に「乙者上下之倒置」とあり、これが

一字の返読に應用されたと見られる。(5)の第一例は「盗心有取」、第二例は「三五耳有」の訓読を漢字で示したと見られ、(6)は「多キ」の活用語尾を「支」の省画体で表したと見られる。

(1)(2)(3)は華嚴刊定記の勘経に通ずるが、(5)(6)は勘経が訓読まで行っていたことを示している。

この根本説一切有部毗奈耶卷第二の僚卷が正倉院聖語藏に現存している。これを調査された春日政治博士は、その白点が句点と返読符と真仮名と訓を表す漢字と一部に省画仮名があり、ヲコト点が見られないので、点本中最古のものとして説かれた。

6、東大寺藏「楞伽經卷第四」一卷(卷末に「東大寺印」の古朱方印あり)

白書による字句の訂正・補入と句切点が施されている。白書より前に角筆の漢字、梵唄譜、合符等が施されている。

(1)字句の訂正・補入

屠販求利天慧亦无教不求不^正想而(訂正)

建立及^正謗知名相不生(補入)

亦教他人^正隨於他尔時世(下欄)「勿」(本文の「忽」を角筆斜線でミセケチ)

(2)句切点

惚亂猶女恒沙等无有異又斷貪恚故^正譬如恒沙是地自性劫盡燒時燒一切地而

白書の句切点は散在する程度であり、本文を読解する時に必要な箇所^正に施したと見られ、本文の訂正・補入の際に書き入れた勘経の跡を示している。

五、神護景雲書写旧訳華嚴經の白書

神護景雲二年願経の正倉院聖語藏の七百四十二巻のうち、

旧訳(六十巻本)華嚴經 五十一巻

(巻第二・四・十三・十五・十六・十八・二十・二十一・六十)華嚴經 五十三巻

新訳(八十巻本)華嚴經 五十三巻
が現存し、白書・白点の書き入れが存する。

この旧訳華嚴經の聖語藏に欠けている僚卷が、東大寺山外に、
卷第十四は慶応義塾図書館藏

卷第十七は京都国立博物館藏

として現存している。聖語藏本を調査する機を得ていないので、山外のこの二巻を調査したところ、白書・白点の書き入れがあり、勘経として使われたと考えられる。しかもこの神護景雲一切経の勘経に当っては、證本として光明皇后願経の天平十二年五月一日経が使われたが、五月一日経には華嚴經が存在しないために、神護景雲一切経の中の華嚴經の勘経の證本としては、舶来経、特に新羅経を利用したと推定される。

その理由の第一は、京都国立博物館藏旧訳華嚴經卷第十七の本
文の中に新羅の仮名(字吐)と見られる褐黒色の書き入れが認められることである。

无量妙色不可思議香^正 无量雜寶 无量寶樹 阿僧祇莊嚴 阿僧祇宮殿 阿僧祇微妙音聲 隨善知識顯現無量一切功德(345、347行)

この書き入れを初めて指摘したのは李丞宰教授である。原本を調査されて、これが韓国の口訣字で名詞句の並列の機能を表したも

のと解された。日本語の仮名でこの字形に近いのは「毛」の第一画と第二画を採った形であるが、この文脈では附加の意を持つ助詞「も」とは異なる。その上、「毛」を表す仮名は白点では「毛」の草書の終画が用いられているから「毛」とは別の字と見なければならぬ。

書き入れは白書・白点で為されているのに、こだけ色の異なる褐黒であるのも不自然である。恐らく、證本とした新羅經にこの口訣字の書き入れがあり、勘經として読解の際にそのまま転記したのであろう。こう考えることによつて新羅の口訣字が入つてゐる訳が理解される。但し、「亦」の省画体は韓國の十二世紀の墨書口訣に見られ名詞字句の並列に用いられているが、新羅時代にその例を見ない所に問題がある。これは資料遺存の制約によるものであり、大谷大学蔵「判比量論」の角筆字吐に眞仮名の省画体が見られるから可能性はある。もう一つの問題は、褐黒色の字吐の書き入れが、京都国立博物館蔵卷第十七のこの一箇所だけであり、慶応義塾図書館蔵卷第十四には見られないことである。聖語藏に現存する條卷の五十一卷の原本調査に期待したい。

證本として新羅經を利用したと推定される第二の理由は、白点にヨコト点が用いられていて、それが新羅華嚴經の点吐の影響によると考えられることである。慶応義塾図書館蔵旧訳華嚴經卷第十四と京都国立博物館蔵卷第十七には、白書・白点散在するが、全卷を訓読したのではなく必要な箇所に加點して読解した跡を示してゐて、勘經の様相が認められる。京都国立博物館蔵卷第十七の白点については李教授の詳しい調査報告があるが、慶応義塾図書館蔵卷第十四を加えて勘經と見る立場から以下に例を挙げる。

(1) 字句の補入

所謂廻（四）一切種智（上欄）「向」（京博蔵卷第十七 66 行）
 (2) 返読符（弧の返読符が白書。「」「」「」「上」「中」「下」は私の補記）
 如（京博蔵卷第十七 127 行）諸最勝所知見一切智乘微妙樂（京博蔵卷第十七 127 行）
（京博蔵卷第十七 389 行）於諸菩薩不可思議三昧正受（京博蔵卷第十七 389 行）
 知一切法悉無所有廣爲衆生說眞實法（慶応蔵卷第十四 235 行）

不以衰賤竊希美號（慶応蔵卷第十四 164 行）
 (3) 句切点
 以彼善根如是廻向令此善根功德之力至一切處（京博蔵卷第十七 161、162 行）
 無上尊重最妙快樂普覆如來常令具足（京博蔵卷第十七 12 行）

復作是念若法非有不可不捨（慶応蔵卷第十四 197 行）
 (4) 眞仮名（管見の全例）
 「心」一切衆生清淨樂欲令衆生皆悉得（京博蔵卷第十七 122 行）
 「可」何等諸法（京博蔵卷第十四 112 行）
 「く」作是念言爲我身中八萬戶蟲故（慶応蔵卷第十四 126 行）
 「く」智者諸業悉廻向（京博蔵卷第十七 294 行）
 「く」亦不妄取諸世間（下欄）「く」（京博蔵卷第十七 288 行）
 「く」所施之餘然後自食（慶応蔵卷第十四 126 行）

(5) 省画仮名
 「つ」（助詞「イ」）「伊」の傍の草書から
 譬如无我（京博蔵卷第十七 225 行）
 菩薩摩訶薩 以此善根皆悉廻向普令一切佛刹清淨（京博蔵卷第十七 362 行）
 莊嚴（京博蔵卷第十七 362 行）

〔 〕（助詞「モ」）「毛」の草書「も」の終画

我諸善根^ニ 亦復如是^一 (京博藏卷第十七 225 行)

我身^ニ 財寶^ニ 俱非^ニ 堅固^一 (慶応蔵卷第十四 165 行)

〔シ〕 (キ) (己) の終画 (以下例を省略)

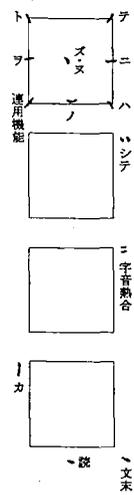
〔ク〕 (ク) (久) の草書から

〔レ〕 (レ) (礼) の旁

(6) 符号化した文字

- 〔ア〕 (コト)、〔ナ〕 (シム)、〔ヤ〕 (スル)、〔リ〕 (セリ)、〔ヌ〕 (ナリ)、〔ヤ〕 (ベシ)、〔ヌ〕 (モチテ)、〔ヤ〕 (モノ)

(7) ラコト点



八箇の単点と複点「ニ」「シテ」・「コ」「字音熟合」と線「」(カ)を用いている。

〔複点「ニ」(シテ)〕

無量諸願皆悉成就攝取无量廣大善根脩習善根救護一切除滅一切放逸憍慢 (京博蔵卷第十七 50~52 行)

究竟成就无上菩提廣爲衆生說眞實法 (慶応蔵卷第十四 118 行)

〔複点「コ」(字音熟合)〕

法无二 (京博蔵卷第十七 147 行)

必蒙天施得全性命 (慶応蔵卷第十四 146 行)

〔左下隅の単点「・」(連用機能)〕

(a) 副詞語尾

爲衆生普令成就 无上智 (京博蔵卷第十七 130 行)

(b) 「為」(副詞的用法)

廻向 諸佛爲衆生欲令衆生常安穩 (京博蔵卷第十七 123 行)

十七 123 行

(c) 「從」「自」で導かれる副詞句

菩薩充滿其利悉從无量法門中生 (京博蔵卷第十七 383 行)

自遠而來 欲有所請 (慶応蔵卷第十四 174 行)

(d) 動詞(又は助動詞)に付いてそれを含む句を連用句として下の句に続ける

皆悉清淨離諸垢普令佛子究竟滿 (京博蔵卷第十七 141 行)

受灌頂轉輪王位七寶具足王四天下 (慶応蔵卷第十四 140 行)

(e) 並列の連詞に導かれる句又は並列の句

若有所行若有所得若正憶念若受持若堅固難壞 (京博蔵卷第十七 325 行)

十七 325 行

(f) 「令」「當」「不」「無」に続く

令獲大利希有之慶 (慶応蔵卷第十四 136 行)

上中下品各不同 (京博蔵卷第十七 293 行)

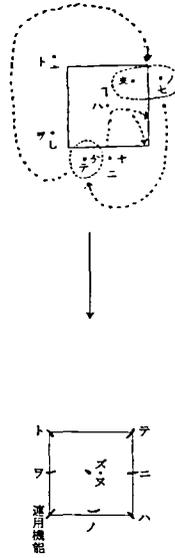
ラコト点の単点のうち、左下隅の「・」は、春日政治博士が「ク」と解説され、築島裕博士が「モ」「ル」「カ」と解説されたが、右掲の(a)~(f)を通じて満足させることは出来ない。一つの音節又は一つのテニヲハを表すのではなく、機能として副詞様の連用機能を表すと見られる。このような「機能」を表すラコト点日本語の訓点では他に使用例が無い。又、(2)の返読符が長い弧を用い、更に返読を受ける漢字だけに施すことも日本の白点・朱点では使用例が無く、朝鮮半島の角筆点に見られるものである。

神護景雲書写旧訳華嚴経のラコト点について、正倉院聖語蔵の卷二・五・七・八・九・十の六巻を調査された春日政治博士は単点「八箇」という素朴なラコト点である所から「発生初期の点法」

と説かれた。小林は、単点の形式が韓国の誠庵古書博物館蔵の華嚴經（初雕高麗版）の角筆点吐に酷似していて、これを基に左図のように変形したものと考えた。

華嚴經（初雕高麗版）角筆点吐

神護景雲書写旧訳華嚴經のヲコト点図



角筆点吐の単点の位置を点線で囲んだように入換えて変形したのは、日本語では助詞「ヲ」も助詞「テ」も使用頻度が高いので、初雕高麗版角筆点吐で「し（ヲ）」に近い位置の「ト（テ）」をヲから遠い右上隅に移して混同を避けたと考えられる。その結果として右上隅のやや下寄りに並んで用いていた「七（ノ）」と「支（能支）」とは左下の「ト」の元の位置に交替させたのであろう。

この「支」は副詞派生接尾辞とされる。神護景雲書写旧訳華嚴經の左上隅の単点が、日本のヲコト点では例のない連用機能に用いられたのはこの「支」の用法を反映したものと考えられる。尚、「ニ」「ハ」も「ト」「ヲ」から離すために右辺に移動させたのであろう。入換えのための移動は時計廻りで行われている。

以上のことは、神護景雲書写旧訳華嚴經が、勘經の證本として新羅の華嚴經を利用し、そこに施されていた点吐を始め返読符等を、読解に当って日本語表記に変えて取り入れた結果と考えられる。

六、平安初期における白点・朱点の展開

次に、こうして訓点表記に使われるようになった白点・朱点がどう展開したのか、平安初期を中心に言及する。

平安時代（九世紀）に入ると、前代に国家的事業として行われた一切経の書写の重要性が薄れ、従って諸経疏にわたる勘經も行われなくなったであろう。替って、奈良時代の国家仏教を代表した南都六宗の、三論宗・成実宗、法相宗・俱舍宗、華嚴宗、律宗が、信仰内容に応じて必要な特定の經典のみを写経し講説するようになって、固定的な宗教色を強めて行く。その結果、訓点の内容が変質する。

奈良時代（八世紀）の勘經と平安初期（九世紀）の訓点との相違を表示すると次のようになる。

時代	經典	目的	加点点所	加点点内容	舶来經の扱い
八世紀後半	勘經	一切経本文の正確な書写	本文理解のために必要な部分に加点点する	字句の校正と併行して訓点を施す	證本として利用し新羅經ではその加点点を讀解に取り入れる
九世紀	平安初期訓点	狭く南都六宗の所拠經典特定所拠經典の内容の理解	講説のため全巻にわたって加点点する	訓読を主とし、校正は從	訓点は独自の發達をし、新羅加点点の影響は符号の一部に残るに止まる

この表で示した相違は、截然と分れるものでなく、勘経は正確に書写することが主目的であつたとしても、次第に本文の内容を深めて、加点箇所も広がり、加点内容の訓点の種類も、時の推移と共に句切点・返読符から真仮名・省画仮名が加わり、更にはラコト点も加わり、次第に平安初期（九世紀）の訓点表記に近づいていたと考えられる。勘経における訓点は平安初期訓点の前段階として連続性を持つていと見られる。

平安初期（九世紀）の主要な訓点資料は、南都六宗の各宗が講読した次のような経典である。

三論宗——百論とその注釈書、中論、十二門論、大智度論、等
成実宗——成実論、等

法相宗——成唯識論、因明論疏、瑜伽師地論、等
俱舍宗——阿毗達磨俱舍論、等

華嚴宗——大方広仏華嚴経とその注釈書の華嚴経探玄記、等
律宗——四分律、十誦律、等

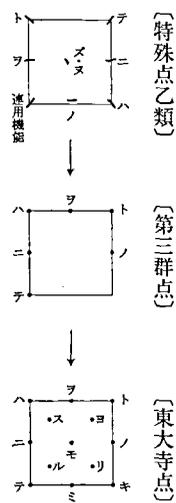
但し、護国経としての金光明最勝王経や経王としての妙法蓮華経のように宗派を越えたものもある。

平安初期（九世紀）の訓点の識語には「講・講師」「聴・聞」の語が多く見られ、十世紀に入つても南都を中心に続いている。これは、各宗派が所拠経典を講説したことを語つてゐる。

經典の講説は、既に天平十二年（七四〇）の審詳による華嚴経に始まっているが、平安初期（九世紀）の各宗の講説はその影響を受けつつ、白点・朱点が訓点表記を担う方法を手に入れて、訓点を独自に発達させたと考えられる。

その訓点は、仮名（真仮名・省画仮名）とラコト点と諸符号（返読符・合符等）である。それらの発達については、既に多くの訓点語学者によつて説かれてゐるのでその概説的な説明は繰返

さないが、ここでは勘経という新しい視点からラコト点の成立に触れることにする。



神護景雲書写 聖語藏華嚴経探玄記 石山寺藏中論平安中期点
旧訳華嚴経（勘経） （東大寺関係） 石山寺藏大智度論天慶元年（九三八）点

右の図はラコト点の単点の図を取り上げたものである。上段の単点図は勘経として用いた神護景雲書写旧訳華嚴経のものである。右辺の上から「テ・ニ・ハ」となるもので、築島裕博士が特殊点乙類と命名され、最も古いラコト点の一群とされている。中段の図は、中田祝夫博士がラコト点を八群に分類し、平安初期には四群が存するうち、第三群点と名付けられたものでその概念図を示した。第三群点の創始者を築島裕博士は東大寺関係と見るのが最も妥当とされる。さすれば同じ東大寺正倉院に遺存する神護景雲書写旧訳華嚴経に用いている特殊点乙類から第三群点が創られたと見ても不自然でない。「テ・ニ・ハ」の他に「ラ・ト・ノ」も位置こそ替つてゐるが語としては一致している。下段の図は、点図集に所載された「東大寺点」の単点の図である。第三群点が平安中期（十世紀）以降に東大寺点に替つて行くことになる。

このようなラコト点の展開を勘経との関係から解明するのは今後の課題である。仮名や返読符・合符などの展開についても勘経との関係から見る必要があるが別の機会を得たい。

注

- (1) 春日政治「初期点法例―聖語藏点本を資料として―」(『国語国文』昭和二十七年十月)。後に「古訓点の研究」(一九六五年刊)に再録。
- (2) 『国語学大辞典』(一九八〇年刊)「片仮名」等。
- (3) 小林芳規「角筆文献研究專論 上巻 東アジア篇」(二〇〇四年刊)。
- (4) 注(2) 文献。
- (5) 山下有美「嶋院における勘経と写経―国家的写経機構の再把握―」(『正倉院文書研究』7)一九九九年)。
- (6) 宮崎健司「天平勝宝七歳における「大宝積経」の勘経」(『日本古代の写経と社会』二〇〇六年五月、所収)。
- (7) 宮崎健司「光明子発願五月一日経の勘経」(『日本古代の写経と社会』所収)。
- (8) 注(6) 文献。
- (9) 注(5) の宮崎健司氏論考。
- (10) 注(5) の山下有美氏論考。
- (11) 注(2) 文献一九九頁所引「三国仏法伝通縁起」。
- (12) 注(5) の山下有美氏論考。
- (13) 注(5) の山下有美氏論考。
- (14) 杉本一樹「聖語藏経卷『四分律』について」(『正倉院紀要』第二十九号、二〇〇七年三月)。
- (15) 注(13) 文献。
- (16) 呉美寧・金星周「大東急記念文庫蔵『華嚴刊定記』について」(『訓点語と訓点資料』第一一九輯、二〇〇七年九月)。
- (17) 月本雅幸「大東急記念文庫蔵統華嚴経略疏刊定記卷五の訓点について」(『鎌倉時代語研究』第二十三輯、二〇〇〇年)。
- (18) 注(15) 文献。
- (19) 金文京「東アジア文化圏の訓読現象―日韓近世の加点点資料」(『口訣研究』第八輯、二〇〇二年二月)。
- (20) 注(1) の春日政治博士の論考。
- (21) 注(1) の春日政治博士の論考。
- (22) 東大寺図書館「正倉院聖語藏経卷調査報告(一)―奈良時代書写の華嚴経について―」(『南都仏教』第八十六号、二〇〇五年十二月号)。
- (23) 注(20) 文献。
- (24) 李承宰「京都国立博物館蔵の『華嚴経』卷第十七の訓点」(『訓点語と訓点資料』第一一七輯、二〇〇六年九月)。
- (25) 「斗白鉉」高麗時代口訣の文字体系外通時的変遷」(『口訣学会編』『아시아諸民族의文字』一九九七年刊)。
- (26) 注(2) 文献。
- (27) 注(1) の春日政治博士の論考、並びに注(20) 文献。
- (28) 注(1) 文献。
- (29) 南豊鉉「高麗時代の點吐口訣에 대하여」(『書誌學報』第二十四集、二〇〇〇年十月、二〇〇一年五月刊)。
- (30) 宮崎健司「奈良時代の一切経の行方」(『日本古代の写経と社会』二〇〇六年五月、所収)。
- (31) 小林芳規「奥書より観た院政期の天台宗訓読の特色」(『鎌倉時代語研究』第二十二輯、一九九九年五月)。
- (32) 築島裕「平安時代訓点本論考 研究篇」(一九九六年)。
- (33) 同「訓点語彙小見」(『訓点語彙集成 第一巻』二〇〇七年、所収)。
- (34) 中田祝夫「古点本の国語学的研究 総論篇」(一九五四年)。(広島大学名誉教授・国語学)